

## 芸術はバクマツだ！ 激動の時代幕末明治の絵師たち

一信、雷洲、国芳、芳年、暁斎・・・

サントリー美術館(六本木) 23.10.11～12.03



江戸から明治へと移り変わる激動の時代、日本絵画の伝統を受け継ぎながら新たな絵師たちが活躍をし、天保の改革、黒船来航、流行り病、大地震、倒幕運動といった混沌とする社会の中で、劇的で力強い描写や、迫真的な表現、怪奇的な画風の作品が描かれている。また、本格的に流入する西洋美術を需要して、多くの絵師が洋風画法を取り入れている。

幕末明治期の美術は、時代のはざまに埋もれ、かつては見過ごされることもあったが、近年では江戸と明治の繋がりを重視し注目を集めるようになった。

本展は、幕末明治期の江戸・東京を中心に腕を奮った多士済々の絵師たちに焦点をあて、その作品の魅力に迫るという企画である。

歌川芳艶（うたがわよしつや） 《両賊深山妖術競之図》



時は平安時代、「鬼童丸」と「袴垂保輔（はかまだれやすすけ）」の二人の妖術使いが、妖術合戦を広げている。左の鬼童丸が炎と大蛇を繰り出せば、右の保輔は負けずと大木と大鷲で対抗している。

うねるようにしてぶつかり合う炎と水の表現は、師の「国芳」を上回らんばかりの迫力に満ち溢れている。

歌川国芳 《讃岐院眷属（けんぞく）をして為朝（ためとも）をすくふ図》



「為朝」が九州から都にのぼる途中に暴風雨に遭遇して一行の船が難破、妻の「白縫」は波を鎮めるために海に身を投げ、「為朝」も死を覚悟し自決しようとした。しかし、どこからともなく烏天狗が現れ「為朝」を制し救われた。